

「2025年度東アジアアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学文学部 4年 鈴木祐里奈

① 学習成果

今回のワークショップ参加を通して、東アジアの国々をとりまく社会学的問題に対する関心を一層高めるとともに、自身の研究テーマについても理解を深めることができた。各国の社会が抱える課題を比較しながら議論する中で、社会問題を相対化して捉える視点が養われたと感じている。

とりわけ、教授陣や他大学の学生との質疑応答を通じて、自分の研究の前提や方法を改めて見つめ直すことができたのは大きな収穫であった。今後の卒業論文の方向性を考える上で貴重な刺激を受けた。

② 渡航先での経験

ワークショップでは、他大学の学生による研究内容やアプローチの違いから多くの学びを得た。台湾大学やソウル大学の学生による独創的な研究テーマに触れる中で、社会学が扱う領域の広がりや、他学生の学問に対する真摯な姿勢に刺激を受けた。

加えて、プログラム全体を通して京都大学内の異なる研究科（公共政策学や農学など）の学生と交流する機会があり、こうした異分野の視点に触れることで、自分の研究をより広い社会的文脈に位置づけて考えることができた。

また、他大学の学生とも趣味や学生生活についてカジュアルに語り合い、研究以外の側面からも相互理解を深めることができた。こうした人との出会いや対話を通じ、多様な価値観の中に自分の考えを位置付ける機会となった。

③ プログラム内容

ワークショップの一環として、立法院の見学やホームレス支援団体の訪問など、社会問題の現場を直接学ぶ機会が設けられた。これらのプログラムでは、当事者の方の生の語りから、マイノリティの人々が抱える現実に直に触れることができた。

この経験を通じて、先入観や一面的な理解を捨て、問題の背景にある構造や声なき人々の感情に目を向けることの重要性を改めて感じた。また、こうした社会課題と学術研究との間の距離についても考えさせられた。現場の主体たちの声や立場を理解することこそが、学問の中立性を支える基盤となるという気づきを得た。

④ 今後への展望

今回のワークショップ参加を通じて、主体的に学び、行動する姿勢の重要性を改めて認識した。大学院進学は予定していないが、今後社会人として働く中でも、自ら課題を見つける機会を積極的に追求していきたいと考えている。

また、現地での経験を通して台湾社会への理解を深めることができた。政治制度や市民社会の成熟、学生たちの社会意識など、多くの面で刺激を受けた。今後、仕事などで台湾と関わる機会があれば、今回の学びと経験を基に、相互理解と協働の促進に貢献できるよう努めたいと考えている。